

正宗白鳥『落日』の光景

—— 転機としての明治四二年秋 ——

伊藤典文

(一) 反転、あるいは「峠」

去年の春の末頃から、私は底のない泥の中に引き摺り込まれるやうな感じがした。さう感じながら不足にも思はないで引き込まれてゐた。秋になると、最早其處から匍はひ上られぬやうになつた。そして「これで己れも行き溜りだ。」と、自分でも覺悟したが、それと共に覺かえのない力が身體に湧き上つた。(「動揺」明四三・四「中央公論」)

「動揺」は、正宗白鳥が長年勤めた新聞社を舞台としてゐる。社長、主筆交代劇のなかで動揺する同僚や私(大村)の動きを「駒口」(近松秋江がモデル)の「色話」の挿話を交えて描いた作品で、当時文壇で何かと話題にもなつた。とりわけ白鳥自身が、作品の掲載された直後の五月末、七年間在職した読売新聞社を退社しているからである。白鳥の退社は「單なる一記者の辞任で

なく、文壇の「一事件」として受け取られたことで「動揺」は文壇的にも強く印象される作品となつてしまつた。しかし、文壇の楽屋裏的な背景やら醜聞は裏話としては面白いが、白鳥の精神史にとつてはそれほど大きな意味を持つようには思われぬ。もし、この作品が白鳥の精神史にとつて重要とするなら、少なくとも冒頭に引用した箇所だけは見過ごせないはずである。この箇所は唐突に主人公の「私」(大村)がなんの前触れもなく「去年」を回想するところである。述べられている事の重大さに比して、前触れだけでなく、その後も「動揺」のどこにもその「匍はひ上られぬ」状態や「行き留り」や「嘗かて覺かえのない力」が具体的に描かれてゐるわけでもない。あまりも唐突で抽象的な回想なのである。「ろくに京都見物もしないで、大阪から有馬伊丹と忙しうに變つた土地へ移つた擧句、私はつい歸るともなく故郷へ歸つた」とあるところからも、主人公「私」の回想ではなく白鳥自身の回想と読めば理解されない事もない。現に白鳥は「去年」つまり明治四二年の秋、京都へと赴き、故郷へと歸つてゐるからだ。そして、

白鳥はこの旅で、京都に居るかつての同僚である河上肇を訪ねている。この旅は正宗白鳥にとつて作家として生きていくうえで極めて重要な転換点となつたことが推測される。そのことは後で触れることにする。

正宗白鳥は「塵埃」(「趣味」明四〇・二二)で注目されて以来、ほぼ毎月のようにどこかの文芸雑誌に小説を発表し、明治四〇年は一四作品、翌四一年も一四作の小説を発表している。さらに小説以上の本数になる評論、随筆、小品の類を書き続け、当時の文芸雑誌で正宗白鳥の名前を見ない月はないというほどのおう盛な執筆活動をしている。特に明治四一年の「何処へ」(「早稲田文学」一月号、四月号)、「五月幟」(中央公論)三月号)、「二家族」(「早稲田文学」九月、翌年四月)は、作家としての地位を揺るぎないものにしてゐる。翌四二年の二月「早稲田文学」は「何処へ」(「易風社 明四一・一〇)に對して「推參之辭」を掲げ、「中央公論」は「正宗白鳥論」を特輯し、五月には三冊目の創作集「白鳥集」(左久良書房)、七月には「二家族」(新潮社)をそれぞれ刊行してゐる。文壇人の目には「昨年から今年にかけて殆ど文壇は氏の独舞台の觀があつた」(白雲子「中央公論」明四二・二二)と映るほどになつてゐた。

発表された小説の数から眺めてみると、もはや文壇のなかでは揺るぎない地位を確立したかの觀のある白鳥だが、作品の多さでは見えてこない個人史というものがある。白鳥の場合、文壇的に脚光を浴びながらも、果たして作家として生きていくことが出来

るのかという確証が得られないままに「外に逃げ道がないから仕方なく」小説を書き、また評論も文芸担当記者という「境遇上餘儀なく評論の筆を執つて居る」²⁾に過ぎないという境地にいた。當時の作家という社会的身分、原稿料収入を考えれば、身を処することへの警戒心を怠らない白鳥のスタイルにとつて、作家になるということは相當な覚悟を要したはずである。だから「生活の苦痛なく、書かずして生き得られる身分になつたら、今の所では小説など、書かないで暮すつもりである」¹⁾というのは本心からの述べ懐である。しかし、その一方で「詮方なしに筆を執るとはいふもの、私には猶小説を書いて生きんとする努力がある。生きんが爲に書いてゐる、職業と思つて書いてゐる。私から小説といふものを奪つて仕舞つたら、他に生くべき道が無い」³⁾というように幼少の頃から文学や読み物に親しんできた者の「性」が顔を出す。心は揺れ動いてゐるのである。つまり、白鳥にとつて「書かないで暮す」という理想はあくまで理想であつて、そんな実現しない理想の次元ではなく、もつと身体に直結した本能の次元で「生きて居る間は何か遣らねばならぬと云ふ、一種の本能の爲に餘儀なく働いて居る」⁴⁾のである。

このように白鳥は文壇で脚光を浴びながらも、作家として生きていくうえの存在意義を掴めないままに「曾てのやうな單純な宗教心」をなくし「宗教も、未來も、超自然も無い。行く處が無い」⁵⁾と呟きながら小説に向き合つていたのである。それは存在証明を見出し得ないまま徘徊う「何処へ」の菅沼健次のモラトリアム⁶⁾とも重なる。

そして、小説を書くことを「畢生の目的とするといふつもりは無かつた。今後とても怎う變るか分らない」ということを口走りながら、初めて、新聞連載小説「落日」を書き始めるのである。明治四二年の夏から秋にかけての事である。そして冒頭に引用した「去年の春の末頃から・・・秋になると」という、あの「動搖」の一節はまさにこの時期の事であり、正宗白鳥その人の精神風景として茫漠と拡がっていた。それはまた「落日」の主人公、吉富新六の精神風景とも重なるのである。

白鳥は「落日」連載開始の前日、次のような「予告」を読売紙上に掲載している。

わが數年來幾多の短篇を試みたのは、この長篇を作らんとすの準備と見てよい。少なくともわれはこれによつて舊い、自己に一段落を告げて、新なる生涯に移りたいと思ふ。この作に着手する心持は、峠に立つて、これまで踏んで来た道を見下すと同じ心持である。通つた足跡も左右の山紫水態も、力の限り忠實に描きたいと思ふ。不幸にして英雄の姿、奇抜なる行為、絢爛の風色が眼界に浮ばずして、平凡單調の色に満ちてゐるかも知れぬが、それが峠から見た事實なら仕方がない（読売新聞「明四二・八・三二」）

連載前日に書かれた「予告」は、自分が描こうとする世界が果たして実現するかどうかわからぬという予防線を張つたままだが、過去への決別と新しい境地への期待感が込められている。四八作目にして初めて新聞連載小説を試みる白鳥に、どう転ぶかは

未知数だがようやくやくにして「転機」が訪れようとしていた。白鳥は、それを「峠」という比喩に込めていた。

（二）新聞連載小説「落日」

しかしながら、白鳥は新聞小説に対してはきわめて否定的である。「やがて純粹の文學は新聞を離れる者だと思ふし、又さうなる事が望ましい。（中略）その日に讀んでその日に棄てるのが新聞の特色なれば、時日に拘泥しない者を新聞に載せるのは惜しい」と。そして今後新聞は「ますます商品的になり實際的」なつて「純粹の文學的作物は、新聞の方で歓迎しなくなる」と書き、生活のためには新聞に頼らねばならない現状を認めつつ、「單行本と雑誌とによつて、作家が自己の立場を作るやうにならねば」日本文學の發達はないとまで予言している。（「新聞と文學」「文章世界」明治四一・八）長年、読売新聞の記者として文學に関り、原稿を持ち込む詩人や作家たちに日々接してきた、その現場を知り尽くした白鳥ならではの実感だ込められている。

『落日』は新聞小説に否定的な白鳥にとつての初めての新聞連載小説である。また、自分が勤め編集する「読売新聞」に小説を發表するのも初めての事である。さらに、主人公が定職を持たない「物書き」（作家）としているのも初めての試みである。可能性としての自分を描こうとしたのだろうか。この初づくしは、新聞という公器とはいえ、読売文芸欄担当という当時の白鳥の位置

が可能なきしめた(試み)であつたとも言える。このことを以てしても、また「予告」に込められた白鳥自身の期待感からも、この作品が白鳥にとつて極めて重要、且つ意味深い試みであつたかが読みとれる。

小説は、明治四二年の春の末、「花の散つて青葉の頃」から始まる。上京して十年になる主人公の吉富新六は「何処へ」の菅沼健次以上に正宗白鳥その人に近い存在である。「晝間のゴロ寝」に思ひ出す吉富の過去は「山腹にある寺の本堂を教場にした小学校」の事や「佛好きの祖母からは御詠歌を聞き覺えた」事や「父に連れられて奥深き山間の私塾に」入つた事など、白鳥が記す多くの故郷や少年期を巡る回想と同じである。何よりも「僕は身體が弱いし、舟に弱いし、遠方へ出かけるのは容易ぢやない、それにこんな小ぼけな體格で」はと、吉富の躰つきまでも白鳥の生き写しなのである。吉富は、すでに定職を失つて一年になり、口述筆記などの物書きで生活している。後半になつて編集者とのやりとりから吉富が小説を書く作家であることが知れる。吉富の無為な生活が淡々と描かれ、筋らしい筋もなく進行する。彼の日々は倦怠と退屈の連続で、何かの刺戟を求めて街を彷徨う。「少なくとも何かの用事で電車に乗つて見たい」と思うほどに当てのない退屈の極みを彷徨うている。交友関係も少なく、画家の卵で従弟の美山と株式市場に出入りする実業家を目指す田澤ぐらゐである。そして、彼等と話していても「二、三時間すると厭になる」ほどにすぐに飽きてしまう。吉富にとつて、浪花町の私娼お露との交

渉や浄瑠璃の女師匠のもとで浄瑠璃を習うという行為のすべてが退屈のぎでしかない。お露との関係も恋愛ではなく金銭の絡んだ遊びに過ぎない。しかし、「女を失つたよりも戀その物を失つたんだ」という吉富でも、美山との会話の中であつて教会に通つていた頃「利根のきみちやんに迷つてた」時「涙ぐんだ」事もあつたらしい。また、お露がわざとらしい嬌態を見せたとき吉富は「五六年前なら、こんな素振にも胸を轟かせて悦しがつたらう。かの教會の女とかうして遊んでゐたなら、美しい夢の樂めたであらうと、彼は世を懼り神を恐れた自分の過去を詛つた」と、吉富の今の自墮落は、過去の真摯な信仰生活者であつた頃の反動であるかのようにある。「晝と人とに服従して、大事な月日を犠牲にした御身」を嘲笑うかのように。まるで、白鳥のキリスト教体験のトラウマを見せつけられているようでもある。

だから、吉富の憎悪の矛先は社会や世間ではなく「先ず、醜體を備へて地の上を匍つてる自分を恥ぢよ」と自分自身に向けられるのだ。吉富自身の頹廢の原因は「自分の不安や恐怖は、畢竟肉體の脆弱に基いてるのに過ぎぬ」ものでそれは「根據のない妄念である」と自覺している。そして作者は「彼れは五六年来體質を盾に自分に向つて凡ての申訳をして来た」と吉富に対して批判的な視点を失つてはいない。目的を喪失した暗澹とした日々が吉富を支配し、どこかで突破口を見出すこともなく小説は進行する。しかし、後半になつて、突破口というほどではないが、かつての同窓で越後で教師をしている戸塚が上京するあたりから変化を見

せる。同じ同窓の平井を交えての語らいの中から、また、戸塚の細君の写真を手紙を得て「何かしら一種の感興が湧き立つ」と同時に「彼れは筆を執つて、夜更けまで、書き通した」という積極的な一面が現れる。もう浪花町に足を向ける事すら吉富には「一種の屈辱と感ぜられ」るほどになっていた。以上が『落日』の大雑把な概略である。物語や筋らしい筋もなく、内容をまとめてみたものの実にまともにくく、かつ論じにくい作品である。

では、この作品がこれまでどう説まれていたか簡単に触れておく。

同時代では『紅塵』（彩雲閣 明四〇・九）や『何処へ』に比べると殆ど話題に上らなかつた。それでもやはり白鳥の時代なのか「氏の個性の眞面目を最も能く發揮した點に於て、氏の作中第一位に置くべきものである」という相馬御風の評がある。また、「著者の長篇の才を世に確保した作で（略）世に疲れた一青年の生活を心内心外の両面から微細に解剖して、現代人の一面を其處に味はせようとした作である」と好意的な評価もあれば、「文章は大分練れて来たが、何うも往日の若やかな感味を減退して来たやうだ。早計にも白鳥氏老いたりと云ふ事は言い難いが、もつと精進の跡を示して貰ひたかつたやうに思ふ」というやや不満げな評価もある。さらに、田山花袋は「主人公と作者が即きすぎてゐて、周囲の人々に対する主人公の判断が主人公自身の判断になつて居らず、作者の判断になつてゐる」と批判的な評価を下している。そして、白鳥の評価を決定的にしたとされる本間久雄の「正

宗白鳥論」では『落日』一篇は確かに「何処へ」と同じく、我國に於て、最もよく世紀末的、病理學的の現代思想を具現した唯その屈指の名篇である」とさえ述べている。これは『落日』に関する限り、あまりにも時代に引き寄せた過大な評価という他ない。その後の白鳥イメージを決定したとされる本間の論はあくまでも日露戦後の時代思潮と「何処へ」を中心とした作品群に流れる白鳥文学全体に対する概括的な評価である。特に、本間の白鳥論で注目されるのは「白鳥氏の諸作を貫く根本情調」としてシニシズムを述べている行で「人生の熱愛するものは、往々にして却つて人生を憎悪することがある。シニシズムの哲学は、即ちこの愛着と嫌悪との二元が相克する場合に生れた」ものとする指摘は、そのまま『落日』の吉富新六の「情調」に流れるものである。

その後、昭和期に入つて、明治文学の一翼としての白鳥文学は多く論じられるようになった。『落日』に言及したものは実に少ない。白鳥自身が他の旧作を語ることはあつても『落日』には殆ど触れてないのも影響している。昭和初期には「一作々々が『作りもの』としての本当に『小説』らしい『構図』を完成してない。殊に『落日』の如きは極めてルーズな建造物である。」と評する勝本清一郎に代表されるように評価は低い。戦後は吉田精一によつて「失敗作」と断定されている。そして、白鳥没後（昭和三七年没）『落日』の本格的な研究論文は、佐々木雅發の『落日から『毒』へ 白鳥の成熟』（『文学年誌』一 昭五〇・一二）などごく少数に過ぎない。佐々木の論はこれまで軽視されて

きたこの作品を「むしろ、白鳥の主題の集中があり深化がある」として再評価し、「體質」や「遺伝」や「生理」によって宿命づけられたところに吉富の「頹廢」を読みとっている。それは「異常神経や強迫観念、幻覚や錯乱のまさに凄絶な世界」を描いた「妖怪畫」や「地獄」などに接している作品と見なしている。

この「落日」で吉富の最も頹廢的な姿は（二十）で描かれている。佐々木はそこを引用し「（性）に繋がれて人間が存在することへの、嫌悪と慚愧を、これほど徹底して真正面から描き出した作家も少ない」とまで高く評価している。その「頹廢」を象徴する描写は次のようなものである。「落日」の中で際立つように、ここだけが陰慘で深刻さを強調している箇所でもあるので引用する。

名も知らぬ女と一夜を共にして夜半目覚め、「顔さへよくは覚えてゐない」見知らぬ女が寝ている。吉富は「汚れた者のやうに離れられるだけ離れてゐて、手も足も触れてゐない」が「むづかしいやうな暖か味が心地悪く」感じる。

……彼は不図マツチの光でその寝姿を見た。赤味の濃い頬、こぶち頬を寄せた目尻、ピリ／＼動いてゐる厚い唇、——それ等が闇の中に彫り出された。頬の削げ唇の朽ちた死骸のやうな寝姿を見るよりも、更に恐しい気味の悪い感じを彼は起した。（中略）闇の何処かに潜んでゐる恐ろしい者に生血を吸られて自然に枯れて行くよりも、自分の力で碎けてしまへと迫つたこともあつた。併し脛甲斐なや、何時も／＼、救

ひは短刀にも拳銃にも求められずして、一時のがれの催眠薬に求められてゐた。（中略）浅問しい忌々しい。人間に生まれたことを悔ひて恥ぢてそう憎むやうな思ひが、激しく彼の胸に喰入つた。そしてさう思つてゐるだけでも、見る／＼心の磨り減され、肉の削ぎ落され、日は窪み髪は白くなるやうであつた。（二十）

このような頹廢と呪詛に充ちた描写と述懐はこの草のみである。翌朝になると吉富は、「従來の通りの生活を續けた。一室に閉ぢ籠もつて氣まぐれに書物を読む。興もないことを寄せ集めた文章を書く。倦んで眠り、覺めては散歩する」（二十一）という日常に戻っている。まるで前夜の出来事が夢であるかのように。實際、夢にも、或いは妄想にも読めてしまうやうな描写である。

佐々木雅發が論じるやうに、果たして吉富新六に、人間を「遺伝」や「體質」や「性」の織りなす「生き物」と見る「そのことの無意味さに傷つき、一切の積極性を喪い、孤絶し解体してゆく人間たちの姿」を読みとれるだろうか。「陰鬱になつて偏屈になつて、狂人染みて」きて「最後を遂げた」祖父の話で「幸福なこの一族の歴史に只一線の暗い影であつた」という理由だけで「遺伝」の宿命、「生理の理法」に吉富の頹廢を還元していいのだろうか。むしろ、「落日」は佐々木自身も述べているやうに「極端に走ることも出来ず、ひたすら危機に耐えていた白鳥自身の現実により忠実であり、その意味で、より「普通の小説」たりえていい「作品」として読まれるべきだろう。何も陰慘で深刻な「妖怪画」

の系譜に結びつけることはないのである。

確かに「落日」には、色調として「世紀末」に彩られた倦怠と虚無的な気分が作品全体を被つてはいる。本間久雄の言う「病理学的」な一面も描かれ、佐々木雅發の言う「(生理)」という抗う術のない絶対的因果の下で蠢く「人間として吉富も描かれてはいた。しかし、それらはこの時代を被つていた(気分)」として読みとつた方がいい。もし世紀末的な頹廢や病理や生理を主題として論じるなら他に取り上げる作品があるはずである。その代表作が佐々木雅發も論じている「妖怪畫」(趣味)明四〇・七)である。上京した父親兵造と吉富新六との穏和で優しい会話ややりとりからは、「妖怪畫」的な主題はけつて浮かび上がつては来ない。ましてや後半に至つて、より積極的で肯定的になる吉富の姿勢は説明がつかないことになる。最後の章(三十一)で戸塚を見送りながら「戸塚一人を見送るよりも、凡ての人を見送つてゐるやうな氣がした」と、これまでの自己と決別し、過去を清算しようとする吉富の感慨や、「無意識に賑やかな明るい方を歩きながら、ふと今の氣持を紙へ書いて見ようと思つた」という、努めて明るさを強調しようとする吉富の行く末に「一切の積極性を喪い、孤絶し解体してゆく人間」が見えてくるだろうか。むしろ展望さえ開けてくるように読めるのである。

「落日」一編の隠れた、しかし大きなテーマは、やはり冒頭に引用した「動搖」の「これで己れも行き溜りだ」という底なし感の経験(それが二十の嫌悪と憎悪に満ちた頹廢的な描写に象徴さ

れている)と「それと共に嘗て覺えない力が身體に湧き上つた」という(それが二十七の「嘗て覺えたことのない希望が胸に浮いた」という吉富の感慨に象徴されている)理知を超えた(「反転」を巡る秘やかな物語ではなかつたか。そして「反転」、或いは「転機」というものは後になってから氣づかれるものでもある。

(三)「反覆される」どうしたはずみか

氏が、京都大學に赴任されて問のない時分に、私は、歸郷の次手に、京都に立ち寄つたことがあつた。懇意でもない人を訪問することを好まない私が、どうしたはずみか、ふと、河上氏を眞如堂近くの假寓へ訪づれた。(河上博士のこと)「中央公論」昭八年八月号)

在社中は懇意にした譯ではなかつたのに、氏が京都大學に赴任されて問もなく、私は、秋の京見物に行つた時、どうしたはずみか、氏を眞如堂のほとりの假寓に訪問した。用事も無いのに佐程親しくもない人を訪ねるなんか、私としては異例であつた。(文壇的自敘傳)「中央公論」昭一三年二月号)七月号)

思想の上でも食物の上でも、Kの領域に足を入れることはなかつた。ところがKが社をやめて京都の學校に赴任して間

のない時分に、私は、歸郷の次手に京都に立ち寄つて紅葉見物をする氣になつたのだが、そのをり、どうしたはずみか、ふとKを、眞如堂近くの假寓へ訪れた。懇意でもない人を訪問することの嫌ひな私が、氣まぐれにもKの家庭へ踏み込んだのであつた。(「交友録」「改造」昭二二年三月号) (以上、三箇所とも傍点は論者)

三つとも回想記と言つて差し支えないもので、「交友録」は隨筆のような小説で、河上肇とは名辞されてはいないが、Kが河上肇であるということは前後の文脈から簡単に読みとれる。

白鳥が河上肇を訪問するのは、その翌日が「天長節」と書かれている(「河上博士のこと」)ことから明治四二年一月二日と推定できる。「落日」の最終回掲載は一月六日であり、おそらく脱稿後、すぐに旅立ったものと思われる。

河上肇は経済学者にして稀有なジャーナリストであり、「貧乏物語」で注目を浴びて、その後急激にマルクスに接近し、大学を辞して実践運動へと参加してゆき、多くの青年に影響力を持った社会運動家でもある。しかし、白鳥が訪れた明治四二年は、まだマルクス以前であり、世間的に注目される以前の事である。白鳥の「河上博士のこと」は、既に世間の注目を浴びていた昭和八年という時点で書かれた「英雄でもなく、徹底的な闘士でもなく」ひとりの人間としての河上肇を描いた名隨筆だが、回想される明治四二年の白鳥にとって重要なのは、勿論河上肇の思想でもその

遍歴でもない。彼の人間としての(存在感)とかつての同僚であつた(個性)の行く末である。少なからず河上肇の転機の内方に興味と関心を抱かせたと言ふべきだろう。

白鳥のような生き方、つまり「幼い時から神経過敏症で(中略)自分の精神の平静を保つことにつねに注意して、日常生活に於ても処世法に於ても、中庸を守り、常識から脱線しないやうに勤めて来た」者にとって、この、時代を隔てて何度も反覆される「どうしたはずみか」の回想はやはり異様でもある。六〇年近きの長きにわたつて文学活動をつづけた白鳥にとって、回想の反覆はけつして珍しいことではない。同じ材料を手を変え品を変え何度も書き続けた作家でもある。しかし、この出来事は白鳥にとっては余程、「異例」な事であつたことは、河上訪問のすぐ後に書かれた「従姉」「趣味」(明四三・二)という短編にも、本題とは関係なく挿話的に「ふと思ひ出して、眞如堂前の知人を訪ね」一緒に伏見から宇治に遊んだことが記され、それが「生涯忘れがたい幸福な旅行であつたと、知人にも語つて悦んだ。」と書かれているからだ。このことから、白鳥の河上肇訪問がいかに忘れがたい印象として刻印されたかは充分理解されるものである。そして、この経験は何年たつても「どうしたはずみか」としか言いようのない経験であつた事もまた事実なのである。

では、白鳥を京都の河上肇のもとに向かわせたものとは一体何なのか。勿論、河上肇に転機をもたらしたもののへの関心だけであるわけがない。つまり、「ふと」とか「どうしたはずみか」とい

う衝動を喚起したものの正体は。言葉では言い尽くし難いが故に「どうしたはずみか」と何年経つても同じフレーズを反覆するしかない白鳥であるが、実は直接に叙しないまでも、遠回しにはあるが語っているのである。

私などが、信仰を失ひ、たゞ意味もなく青年期を過してゐた間に、河上氏は、自己生存の態度についていろ／＼に心を致してゐたのであらう。(河上博士のこと)

たまに、他人行儀の話をするくらゐの淡い交りであつたが、私は無言のうちに、彼から何かを云はれてゐるやうな感じにした。(交友録)

ここには、自己中心の個人主義者、エゴイステックな白鳥らしからぬ(他者)の視線を受けとめる姿勢がある。新聞社時代の同僚、河上肇の生活態度のなかに、かつての自分の信仰時代の自己像を合わせ鏡とした姿がそこに映つていたとも言える。白鳥を京都の河上肇のもとに向かわせた意識の底には、おそらく「自己生存の態度」を決定できないもどかしい自己との決別を含蓄させていた。「自己生存の態度」とは、人生如何に生くべきかという、己れの存在を存在たらしめる目的、意味、価値をたとえ彼方であっても想定できるという確信のようなものである。勿論、確信を得られたかどうかはこの際問題ではない。

(四)「処世」という経験、作家への自立

『落日』と『落日』脱稿後の河上訪問。作品と作品以後の出来事のこのふたつは不可分のままに繋がっている。そして『落日』のなかにその繋がりを暗示する白鳥の姿が吉富新六を通して描かれていたのである。先に『落日』が白鳥にとって初めての新聞連載小説であり、実験的試みと言つたが、『落日』が吉富を中心とした作品内の物語と、その『落日』を新聞小説として記述しつづける白鳥自身の心境が吐露されるという混在を示しているからである。先に引用した花袋の「主人公の判断が主人公自身の判断になつて居らず、作者の判断になつてゐる」と否定的に評したところでもある。白鳥は花袋が否定的に捉えたところをむしろ積極的に肯定し、主人公と作者の渾然一体とした自在な書きっぷりを実践したきらいがある。例えば、(九)で吉富が旅への想像を巡らし、旅立ちたい衝動を描いている箇所がある。「僅かの調度や書物を賣り拂つて、それに纏はれる厭な記憶を拭うて身も心も軽く、束縛のない旅に出るのは愉快に違ひないと定めて見た。見馴れた顔に離れ、定り切つた日常の話に分れて、行衛を晦ますだけでも楽しい」と。しかし、旅立ちたいのは吉富ではなく白鳥の方である。事実、白鳥は『落日』脱稿後、すぐさま京都へ旅立っているからだ。それに引き換え『落日』の吉富は、旅どころか女とふたりで郊外を散歩するだけに終わっている。吉富は日常から逸脱し

ないまま、物語は拡がりを見せないままに日常に埋没していく。また(二十五)の書き出しでは「或る日曜、吉富は朝早くから筆と煙草を手放さなかつた。書くに足る材料もないので仕事は募取らず」と書き出されるが、「書くに足る材料」がないのは吉富ではなく白鳥自身の方である。すぐその後で、まったく新しい「書くに足る材料」として「奮い同窓の平井」の登場と「戸塚が越後から上京」という場面を配しなければならなかつたのだから。全三十一の章からなる作品の(二十五)に至つて新しい人物が登場することになる。登場人物が少ないだけに、後半の二人の同窓の登場は際立つ。こういうところを勝本清一郎は「極めてルーズな建造物である」と構成上の破綻を指摘するわけだが、そもそも、白鳥の小説に「構成」や「建造物」を期待することは土台無理な話である。既に小説を書き出す以前の白鳥の評論に、作家はどのように書いても自由であるという理念を自己に課してもいた。白鳥はエリオットの構成的作品とプロンテの創生的作品を比較して、「エリオット程になれば莊嚴な大伽藍となつて見ごたへもすれど、淺はかな人生觀や宗教觀を持つた作家が恣ま、に切り盛りして建てた和洋折衷の別荘ぐらゐでは有難くない」として、樋口一葉を持ち出し「一葉はプロンテに比べて、規模は小さいながらも創生的で、自ら産み出して行く氣味があつた、我は作者の用意として寧ろ後者を取りたいと思ふ」というふうな「構成」よりも自在な「創生」という立場で小説を読んでいた。そして「作家は第二の造化として如何なる者でも随意に産み出すがよい」(以上

「瑣言」「読完新聞」明三四・九・三〇)という考えは、自分が小説を書くようになってより強化されたともいえる。この「瑣言」には、自然主義や写実主義に拘泥しない、柔軟で幅広い白鳥の文學觀が見事に表明されているのだが、良き読み手としての白鳥は書き手の白鳥と同列ではなかつた。と言うより、白鳥には「構成的」な長篇小説は書きたくても書けなかつた。「私は短篇を書く時、一端を捉へて全體を見せるといふやうな考へを爲して居る。が、長篇となると、そんな事などは考へなしに漫然と筆を落して行く」(興味もない創作熱もない)「文章世界」明四一・一一)しかなかつたのである。ましてや、初めての新聞連載の長篇『落日』に「構成」や「大伽藍」は到底望み得ないことは明らかであろう。

さて、(落日)という表題だが、(落日)には頽廢と凋落のネガティブなイメージと沈静と落ちるべきところに落ちるといふある種の諦念を含んだ必然性を徴している。ネガ(陰)とポジ(陽)、否定と肯定、または消極性と積極性の混淆とした配色によつても彩られているのである。本間久雄から佐々木雅發まで、これまで『落日』はそのほとんどが否定と消極性、つまり、吉富の頽廢と倦怠、人間憎悪という半面の世界だけが論じられてきた。吉富の積極的で肯定的な半面は殆ど無視されてきた。その積極的な一面は次のようなところに顕著である。雑誌社の知人に持ち込んだ原稿を褒められた吉富の感慨は「かの知人の褒辭ほめことばは空お世辭とも盲批評とも思われず、一度浮いた心は元の所へ沈んで行かなかつた。で、この次にはあれを書いて見ようなど、例になく意氣込んで、

再び暑い光の中へ出た」(二十七)と、実に単純だが、しかし極めて率直に述べているのである。

もはやここには、あの「何処へ」の菅沼健次の影はない。吉富新六は、敢えて言うならば、モラトリアム人間の「何処へ」の菅沼健次が、漸くにして、存在証明を得た「大人になった」姿なのかも知れない。それを果たして〈成熟〉と言えるかどうかはわからない。そこには多分に何ものかを捨てざるを得ない〈諦念〉が含まれているからである。吉富が故郷の旧家を継ぐ弟夫婦への出産の祝辞を認めるところにそれは暗示されている。

生まれて初めて他人行儀な文辭を並べながら、自分でこんなことを書かねばならぬやうな境涯に入りつゝ、あるのに氣付いた。(中略)心では隣りの人と千里を隔て、生きてゐると思つてゐても、實際ではか細い足で、それと歩調を合せて行かねばならぬのだ。萎びた花も萎びた實を結ばねばならぬ様になつてゐる。(十七)

そんな自分を認めざるを得なくなつていたのである。「萎びた花」ではあるが、もはやひとりで勝手に咲き誇つていただけでは済まない身になり、花も実を結ばねば世を処していくことさえ出来ないのである。そして、それは〈書く〉という職業に対して「萎びた實」をつけなければならなかつたのである。

ウカ／＼してる間に、何時かこんな事を書いて、それを賣物にする人の仲間に入つてるのに、彼は氣がついた。東京に生きる限りは厭でもこの職業を離れられぬやうに、自分の身

に定りがつきかけたと思つた。だが、定りがつきかけたのを憐む中にも、其處に微かな自信の光が閃めいた。四五年來嘗て覺えたことのない希望が胸に浮いた。世間が廣いやうに見えた。平常尊敬もしてゐない知人の僅かな推讃の言葉が、暗黒の中に自分の道を照らして呉れる提灯の光と見えた。(二十七)

この吉富新六の感慨はそのまま正宗白鳥その人のものである。白鳥にとつてそれは、かつての同僚時代の河上肇に見出した「自己生存の態度」を自分に引き寄せ、作家として生きるしかない自己像を見据えた過渡期の光景として描出されたのである。

どう足掻いても陽は落ちるところにしか落ちない。白鳥が〈落日〉の彼方に見たものは、けつして明るいものではなかつたが、「自分の道を照らして呉れる提灯の光」が灯つているだけでも充分であつた。『落日』を書き終えた時、白鳥のまえには、作家として生きていくうへの微かな自信と大いなる必然性の筋道が微かに見えていたのである。最早、読売新聞退社は時間の問題でしかない。

『落日』脱稿後の京都への旅、そして河上肇訪問。

「どうしたはずみか」としか言えない衝動の中身は、既に『落日』によつて間接的に描出されていたのである。それは、言葉では言い尽くし難い〈経験〉として、重くその後の白鳥を決定づけるに足る「出来事」としても記憶されたのである。このような〈経験〉は白鳥自身によつて直接的には語られることはなかつた

が、そのヒントを与えてくれる白鳥の文章をここに紹介してこの稿を締め括りたい。

何を望むのか、何を一生の信條とするかと、自分で自分を問ひ詰めて見るのに、それは、筆でも書きあらはせず、口でも云ひあらはせないのだ。私の心を的確に言ひ現し書き現し得られる言語文字が、世に存在しないやうなものだ。それで、我信條については云ひ悩んでるのであるが、試みに、文學だけについての我信條について考慮すると、多少の變遷を経て、或る所に到達してゐるやうである。文學の妙味を味ひ盡した結果でもなく、自分でいい氣になつてゐるのではないのだが、長い年月、餘儀なく同じ事をやつてゐると、自分だけでこんなものかと思ひつくやうになるのである。若い時分からあかかうかと思ひ迷つてゐたものが、詰まりはこんなものかと獨り合點をするやうにもなるのである。〔私の信條〕

「世界」昭和二五・一二

明治四二年秋の京都の河上訪問。また、新聞小説「落日」が示しているのは、人生如何に生くべきか、という問いかけであり、觀念や宗教に安易にそれを求めるのではなく、「あかかうか」と思い悩みながらも「詰まりはこんなものかと獨り合點」する光景であつた。そして、文壇という世界で、作家として身を処して生きるしかない「自己生存の態度」の決定は、言ひ換えれば、白鳥にとつてそれは「処世」という（経験）の最初の訪れであつたのかも知れない。

注

- (1) 吉田精一『自然主義の研究・上巻』（東京堂出版 昭三〇・一一）
- (2) 正宗白鳥「如何にして文壇の人となりし乎」（『新潮』明四一・一八）
- (3) 白鳥のスタイルといつても一言で語れるものではない。自分を束縛しない自在さ、心を窮屈にしない姿勢、固定的な考え方に囚われない身軽さ等々、（『処世』の自由主義者としての振舞いはいくつもあげられる。それらはすべて白鳥の世の中に對しての「身のこなし方」から來すものである。この文脈で言えば、世に對する警戒心を怠らない姿勢が浮かぶ。少年の頃のわずか二三里の村からの脱出に過ぎない「家出」体験を語り「これだけの事でも私には異例であつて、私には少年時代から脱線行為は無かつた。早くから浮世を渡るすべを心得てゐた」（『世渡り上手』昭一四・五「改造」）と述べている。筆一本で世を渡ることがいかに覚悟を要したかは理解されよう。
- (4) 正宗白鳥「仕方なしに書く」（『新潮』明四一・九）
- (5) 正宗白鳥「興味もない創作熱もない」（『文章世界』明四一・一一）
- (6) 同前（4）
- (7) 正宗白鳥「行く處が無い」（『文章世界』明四二・七）
- (8) 大井田義彰「正宗白鳥『何処へ』試論（モラトリアム人間）の末路」（『東京学芸大学紀要第2部門』第五〇集 一九九・九）

二)は、これまで「何処へ」の菅沼健次を「世界苦」の体現者などと見なしてきた従来の評を過当なものとして退け、「他者に目覚め」ない、「真の(成人)に生まれ変わ」れないモラトリウム人間としての健次像という新しい説みを提出している。

(9)これは「無名通信」(明治四二・一〇・一発行)に発表された談話である。編者の次の前書きが添えられている。「残暑の甚しい日、本郷東片町の寓に正宗白鳥氏を訪づれた。氏は紺飛白の単衣物を着て、膝をくずして、机に向ひ、頻に原稿用紙の上に万年筆を走らせて居た。多分長篇小説『落日』の原稿であらう……」と。この談話が『落日』執筆中のことを窺わせる。

(10)『落日』(『読売新聞』連載は明治四二年九月一日から一月六日 翌二月左久良書房より刊)執筆時期に関しては「趣味」(明治四〇・九)の「文藝界消息」に「正宗白鳥氏は目下『落日』と題する長篇を起稿中で、既に四五十枚ばかり脱稿して居ると。主人公は白鳥氏自身で、飽まで其の面目を發揮するんださうだ。」とある。明治四〇年九月といえは、まだ「何処へ」も「二家族」も発表されていない時期で、果たしてこの「消息」の記事の「落日」が、日の目を見た「落日」なのかどうかは不明である。構想はあったかも知れない。

(11)この小説の時間は掲載された年と同じ明治四二年であるのは(九)で吉富が新聞を買って電車に乗り込み「此頃は高商問題と日糖事件とに興味を持つて、四五日忘れないやうに續けて讀んでゐる」とある。日糖事件(大日本製糖株式会社の重役と政

治家との贈取賄事件)が新聞紙上を連日賑わすのは政治家の検査が始まった明治四二年四月半頃からである。

(12)意外なことだが、白鳥が作家を主人公にするのはこれが初めてである。「私」を主人公とした作品も記者であったり、画家であったり、職業不明であったりと作家は登場しない。『落日』執筆時、彼はまだ新聞記者で定職を持つて居る。とすると、吉富新六は白鳥がまだ実現していない(自立した作家)を演じていることになる。吉富が小説を書いていることを示す場面は(二十七)にある。吉富の原稿を受け取った雑誌社の知人は「こんな人が實際にあるんですか」との問いに対して吉富は「事実でもないんです。私共経験の狭い者は、そのまゝで物になるやうな事實には一度も接したことはないんですから」とその原稿が虚構の作品であることを示している。

(13) 相馬御風「四十二年文壇概観」(『新潮』明治四二・一二)

(14) 無署名「新刊紹介」(『文章世界』明治四三・一)

(15) 無署名「新刊紹介」(『新潮』明治四三・一)

(16) 田山花袋「明治の作品研究」(『文章世界』明治四四・四)

(17) 本間久雄「正宗白鳥論」(『新小説』明治四四・六)

(18) 勝本清一郎「正宗白鳥」(『前衛の文学』(昭五新潮社)所収。

後『近代文学ノート』(みすず書房 昭五四・七)

(19) 同前(一)

(20) 柳井まどか「落日」試論(『国文』昭六二・七)

(21) 佐々木雅發「白鳥の拘執」『妖怪畫』の系譜(『文学』昭四

四・一一) この論文はその後、多彩に論じられることになる
「妖怪畫」系統の先陣となった論考である。

(22) もうひとつ別の角度からこの旅の時期を確定するものとして
「岩野泡鳴論」(『中央公論』昭三・八)がある。「明治四十二年
の末であつたと記憶してゐる。(略)紅葉の頃京都に遊んで、
有馬や大阪を経て故郷へ歸つて、歸京後は新年号の小説に筆を
執つていた」とある。

(23) 「河上博士のこと」には、当時、時代の英雄、闘士であつた
河上肇が、今度は河上の方から白鳥に面会を申し出て会つた時
の事が書かれている。尚、河上が獄中で白鳥の『文壇人物評論』
を繰り返し読み、白鳥論を書いてみたい衝動を感じたという、
殆ど交流のない二人の、目に見えない心の交渉に関しては、上
田博『昭和史の正宗白鳥』(武蔵野書房 平成四・一二)に詳
しい。

(24) 正宗白鳥「心の焼跡」(『群像』昭二六・七)

(25) キリスト教信仰時代の白鳥に関しては別個に論じなければな
らないが、救済と永遠を信じることで、存在することの不安や
怖れを白鳥なりに回避させていたようである。

(付記)

正宗白鳥の本文引用は福武書店版『正宗白鳥全集』全三〇巻
(昭五八・四一六一・一〇)を使用。「落日」からの長い引用文
には章番号(漢数字)を示した。

(いとう・のりふみ 編集者・本学大学院研修生)